

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第42集

清水馬場城遺跡発掘調査報告書

個人住宅新築工事に伴う発掘調査

令和7年3月

一関市教育委員会

序

一関市千厩町清田地区は、自然豊かな丘陵部が大半を占め、北部に東西を走る国道284号線やJR大船渡線があり、千厩町と室根町を結んでいます。この地区では、縄文時代から人々の生活が確認でき、清田台遺跡をはじめとした遺跡が確認できます。このほか、多数の埋蔵文化財包蔵地が所在していますが、その一つに清水馬場城遺跡があります。中世の城館跡として知られ、昭和58年の千厩町道改良工事の際に行われた発掘調査では、掘立柱建物跡が確認されています。

令和6年度に、清水馬場城遺跡の範囲内で個人住宅新築工事が計画され、市教育委員会による工事立会を実施したところ、溝状遺構を確認しました。これを受けて緊急発掘調査を実施し、このたびその成果を本報告書にまとめたところです。

本報告書により、この調査成果を広く公開し、市民並びに全国の方々にも当市の文化財を知って頂き、関心が高まることを期待するとともに、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

結びに、調査に際してご協力を頂きました地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々にご協力いただきました。衷心より感謝を申し上げます。

令和7年3月

一関市教育委員会
教育長 時 枝 直 樹

例 言

- 1 本書は、岩手県一関市教育委員会が令和6年度に実施した清水馬場城遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 この調査は、一関市千厩町清田字東沢地内の宅地造成工事に係る工事立会において遺構を確認した範囲、及びその周辺の掘削を受ける範囲の記録保存を目的とした緊急発掘調査である。
- 3 調査対象地は、清水馬場城遺跡のうち、一関市千厩町清田字東沢34-2である。
- 4 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 時枝直樹であり、現地調査は文化財課が担当した。
- 5 調査体制は以下のとおり。

一関市教育委員会事務局文化財課	副参事兼文化財課長	氏 家 克 典
	課長補佐兼文化財係長	金 野 修
	学 芸 主 査	菅 原 孝 明
	文化財調査研究員	千 葉 孝 弥
		菅 原 わかな
	会計年度任用職員	小 岩 誠 也

- 6 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は千葉が行った。
- 7 測量に使用した経緯度の基準は世界測地系「平面直角座標系X」を使用した。
- 8 挿図中の高さは標高値を示している。
- 9 図4、図6の地形図は、一関市長の承認を得て測量成果を使用し、加工して作成した(許可番号令和7年2月12日政第11003号)。
- 10 図2の昭和24年撮影の航空写真および大正2年大日本帝国陸地測量部作成の地形図は、国土地理院の了解を得て掲載した。また、図5に使用した地形図は、国土地理院の25000分1の地形図「千厩北部」、「千厩南部」、「折壁」、「津谷川」を合成して作成した。
- 11 土層断面図の土色表示は、『新版標準土色帖2002年度版』(財団法人日本色彩研究所)を使用した。
- 12 本遺跡は昭和58年に千厩町教育委員会が発掘調査を行っており、文化財課調査研究員畠山篤雄がその成果をまとめ、附章1に収録した。
- 13 本調査で出土した動物遺体については、奥松島縄文村歴史資料館文化財専門官の菅原弘樹氏に分析を依頼し、その結果を附章2に収録した。
- 14 調査協力者・機関(敬称略・50音順)
菅原弘樹(奥松島縄文村歴史資料館)、高橋京子、高橋達也
岩手県教育委員会生涯学習文化財課
株式会社鈴佳

目 次

序	1
例言	3
目次	4
1 遺跡の位置と環境	5
(1) 遺跡の位置と現況	
(2) 地理的環境	
(3) 歴史的環境	
2 近世の記録に見える清水馬場城	12
(1) 「古城書上」と地誌	
(2) 伝来文書	
3 調査に至る経緯と経過	13
(1) 調査に至る経緯	
(2) 調査経過	
4 発見した遺構と遺物	16
(1) 層序	
(2) 発見した遺構	
(3) 出土遺物	
5 調査成果のまとめ	22
写真図版	25
附章1 大手門地区の調査	29
附章2 清水馬場城遺跡出土のウマ遺体	38

1 遺跡の位置と環境

(1) 遺跡の位置と現況

清水馬場城跡は岩手県最南端部の一関市にある。一関市は平成17年に西磐井郡花泉町、東磐井郡大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村、平成23年には東磐井郡藤沢町と合併して東西約63km、南北約46kmに及ぶ広大な市域となっており、本遺跡はその東部に位置する千厩地域（平成17年に一関市と合併する以前は東磐井郡千厩町）の東部にある。

本遺跡は市の中心部から東へ23.5km、千厩地域の中心部からは5.2kmの位置にあり、東側の室根地域（旧室根村）を超えると宮城県気仙沼市に至り、約1.8kmで海岸部に達する。

本遺跡は北東から南西方向に張り出した低丘陵の端部に立地し、東西約200m、南北約250mの範囲が城館の遺跡として周知されている。標高は丘陵頂部が184m、北西部の低地が152mである。現状は山林と畑であり、民家が点在する。長年の耕作等で旧形状が部分的に失われているが、空堀や土塁状の高まりが確認できる。

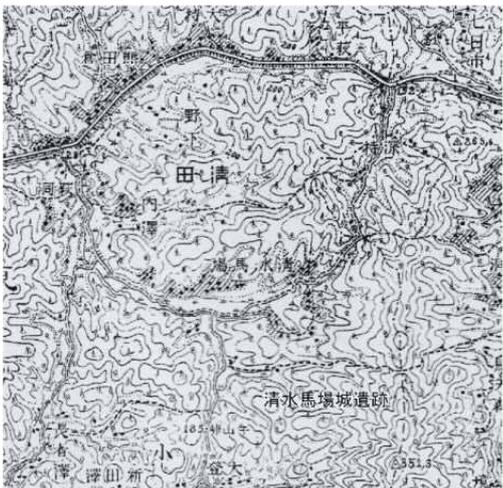


図1 遺跡の位置

(2) 地理的環境

本遺跡がある千厩地域は、地理的にみると北上山地の南端近くに位置している。千厩地域は標高500m以上の山地やそれよりやや低い丘陵地が大部分を占め、北東部から東部にかけて室根山（標高895m）、太田山（684m）、大森山（759m）、徳仙丈山（710m）など比較的高い山並みが連なり、南東部には観音山（402m）、南部には黄金山（481.6m）、保呂羽山（433.1m）、西部には三島山（345.6m）、大峰山（360.4m）、北部には物見石山（352m）、立石山（344.7m）などがある。『東磐井郡誌』の付録「東磐井郡全図（大正四年陸地測量部地図五万分二據ル）」にはそのような千厩地域の地形がよく表れている（岩手県教育会東磐井郡部会1925）。

丘陵地の地質は閃緑岩を含むトータル岩（竹内・御子柴2002）で、広義の花崗岩であり、藤沢地域の保呂羽山から大東地域の御殿山、川崎地域の大峰山から室根地域の室根山にかけて、南北約63km、東西約12kmと細長い楕円形状に分布している。花崗岩は全般に風化作用（マサ化）によって平坦化され、緩斜面が発達するとされている（岩手県1974）。河川に沿って発達した台地や標高の低い低地などは少なく、低地は国道284号や小梨駅から本遺跡に至る山間にわずかにみられる。丘陵の裾部は開析によって形成された大小の谷が発達し、それを利用したとみられる細長い帯状の水田が多数ある。東沢や西沢など沢に関わる小名が多い（図4）。



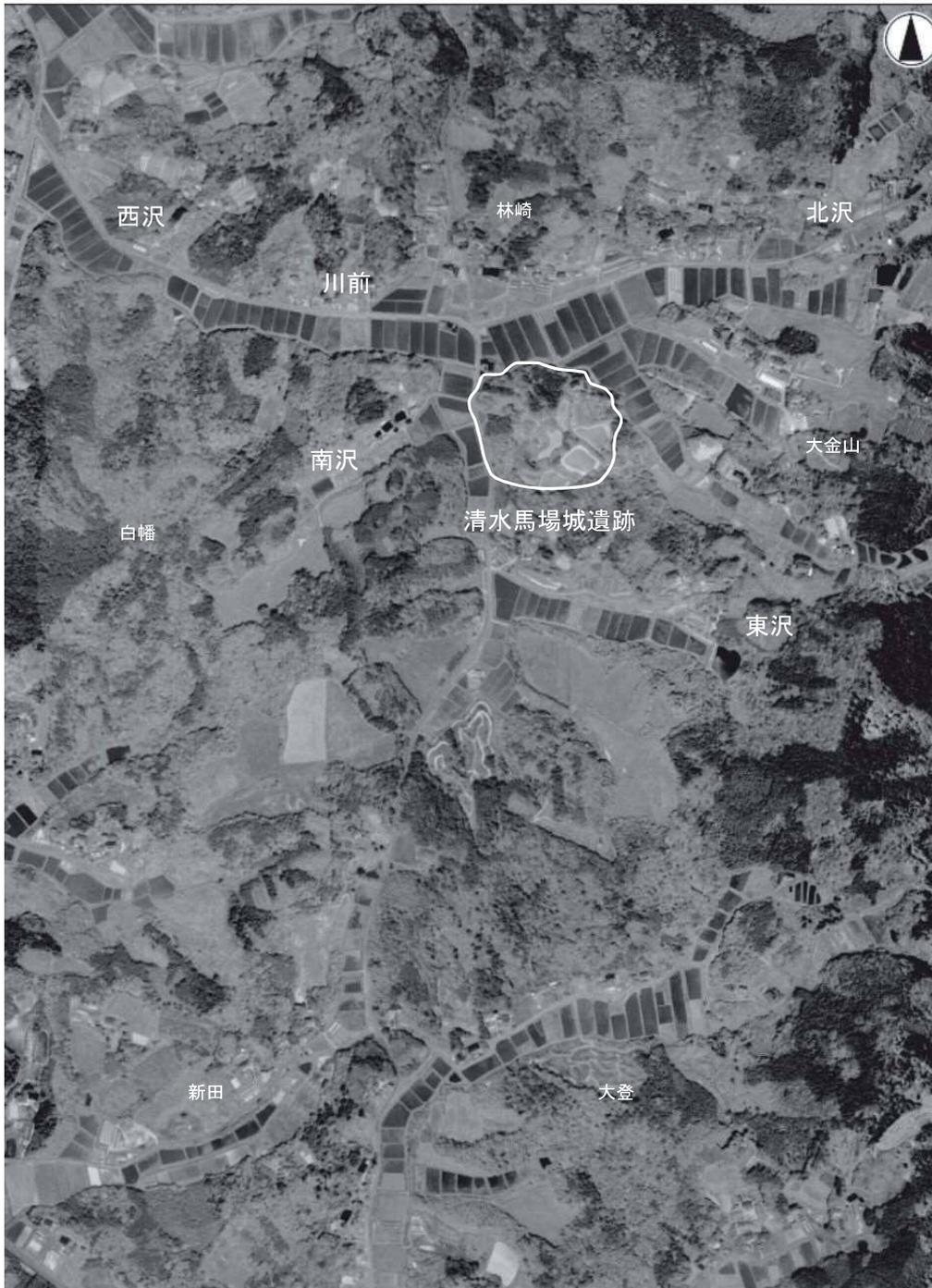
上：昭和 22 年撮影（国土地理院）
右下：同上部分拡大
左下：国土地理院発行の 5 万分 1 地形図「千厩」
大日本帝国陸地測量部（大正 2 年測図）の
一部を加工して作成

図 2 遺跡周辺の地形



『東磐井郡誌』付録「東磐井郡全図」（縮尺 100,000 分 1）
 中央やや右上に「清水ノ馬場」がある

図3 大正4年の千厩町とその周辺



一関市統合型地理情報システム 平成 25 年撮影写真を使用

0 S=1/10000 500m

図 4 遺跡周辺の沢状地形と小名

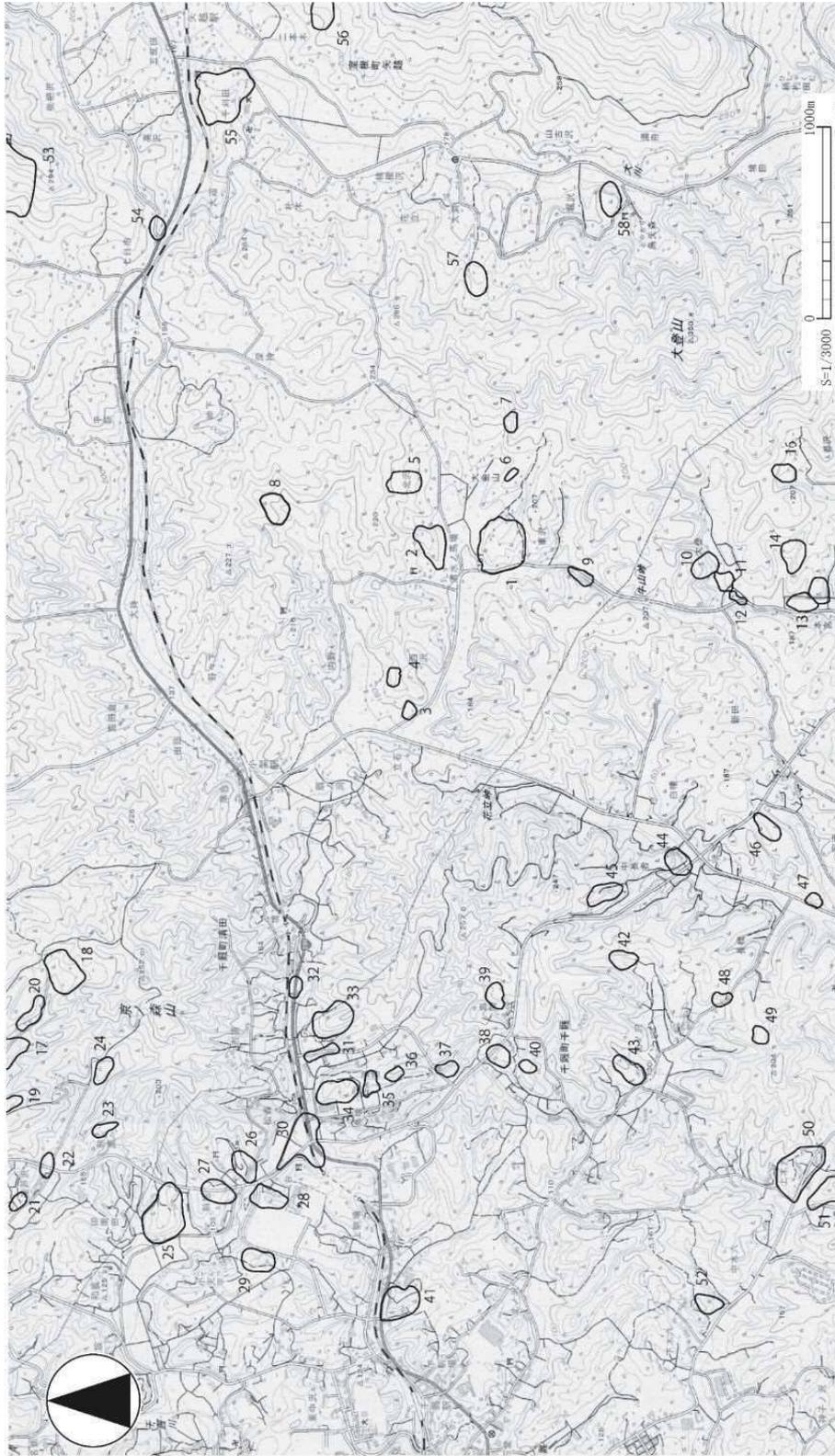
(3) 歴史的環境

本遺跡を中心とする千厩地域東部から室根地域西部にかけては、縄文時代から近代にかけての埋蔵文化財包蔵地が多数知られている(図5、表1)。年代別に多いのは縄文時代の遺跡であり、特に千厩地域東部の丘陵上に多く分布している。発掘調査が行われた清田台遺跡(図5-30)では前期から晩期にわたる竪穴住居跡が多数発見されており、そのうち中期の遺構が半分以上を占めている。中長者I遺跡(44)では早期の柱穴群を発見し、包含層からは押型文、沈線文、撚糸文、表裏縄文など早期の土器が多く出土している(千厩町町史編纂委員会1999)。要害館跡(31)では中期の竪穴住居(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2001)、鳥喰Ⅲ遺跡(36)では後期の土器の捨て場が見つまっている(岩手県教育委員会2001)。詳細は不明であるが、金取沢I遺跡が前期(17)、新地I遺跡(26)、清田境I遺跡(32)が早期・前期(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2008)、桃園遺跡(33)が中期の散布地として知られている。弥生時代の遺跡としては金取沢II遺跡(18)が散布地となっている。古墳時代から奈良時代にかけての遺跡については情報がほとんどなく、清田境I遺跡(32)で平安時代の土師器坏・甕の破片が出土しているが詳細は不明である。

中世の遺跡としては各地域に中世の城館跡が多くみられる。千厩地域を含む磐井郡は、文治5年(1189)の奥州合戦後に葛西清重が地頭職に任じられた5郡2保の一つであり、それ以降葛西氏の支配は豊臣秀吉の奥羽仕置による葛西氏の滅亡まで続くことから、この地域の城館は葛西領の中の城館ととらえることができる。

発掘調査が実施されたものとしては要害館跡、折戸館跡、上折壁城遺跡がある。要害館跡(31)では掘立柱建物跡が25棟、中国明代の青磁碗、白磁皿、染付皿、瀬戸・美濃産の陶器皿などが発見されており、建物跡の中には中世後半にさかのぼるものもあると考えられている。折戸館跡(41)でも掘立柱建物の柱穴や中国明代の染付碗などが見つまっている(畠山1985)。上折壁城遺跡(55)は城館の南東隅の調査であり、掘立柱建物や溝、井戸、土坑などが見つかった。出土した陶磁器のほとんどは近世以降のものであるが、明代の白磁碗(あるいは皿)、瀬戸産の陶器皿などが見つまっている(一関市教育委員会2020)。城館以外では大金山金山(7)、山寺跡(40)が中世の遺跡の可能性があると見られているが詳細は不明である。

近世になると葛西氏領はすべて伊達政宗の支配するところとなり、磐井郡も仙台藩領に組み込まれることになる。本遺跡が所在するところは清水馬場村であり、その名は寛永19年(1642)の「清水馬場村検地帳」が初見で、正保2年(1645)の仙台領国絵図にも描かれている。清水馬場村は万治3年(1660)に仙台藩領から分知された伊達宗勝の一関藩領となり、寛文11年(1671)に再び仙台藩の支配となるが、天和元年(1681)には田村氏を領主とする一関藩領となって幕末に至っている。この時期の遺跡としては一関藩御蔵場跡がある(11)。要害館(31)や上折壁城遺跡(55)では建物跡や陶磁器が見つかっており、廃城となった中世の城館が再利用されたものであろう。三枚山鉾山(53)は天正年間(1573～1592)に金を採掘したという鉾山で、近代の坑道や火薬庫の跡が残っている。近世になると仙台領内でも街道が整備され、奥州街道の金沢から気仙沼に通じる気仙沼街道が千厩を經由し、清水馬場村の北側約2km付近を現在の国道284号がほぼ踏襲して東へ延びている(岩手県教育委員会1980)。室根地域の七日市一里塚(54)は気仙沼街道沿いに設置された一里塚の一つである。詳細は不明であるが、二本木経塚(56)やコウドウボウ塚(37)、上木六塚群(51)などもこの時期の遺跡と考えられている。



国土地理院発行 25000 分 1 地形図「千厩北部」、「千厩南部」、「折壁」、「津谷川」を加工して作成。

図 5 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	年代	種別
1	清水馬場城（赤間館）	千厩町清田字東沢、字南沢	中世	城館跡
2	清水馬場小館	千厩町清田字林崎	中世	城館跡
3	塚	千厩町清田字西沢		塚
4	西沢Ⅰ	千厩町清田字山崎	縄文	散布地
5	北沢Ⅰ	千厩町清田字北沢	縄文	散布地
6	十王堂跡	千厩町清田字大金山		社寺跡
7	大金山金山跡	千厩町清田字大金山	中世カ	生産遺跡
8	内野	千厩町清田字内野	縄文	散布地
9	南沢Ⅰ	千厩町清田字南沢	縄文	散布地
10	大登館	千厩町小梨字大登	中世	城館跡
11	一閑藩御蔵場跡	千厩町小梨字大登	近世	屋敷跡
12	梅屋跡	千厩町小梨字大登	近世、近代	屋敷跡
13	大登Ⅰ	千厩町小梨字大登	縄文	散布地
14	大登Ⅱ	千厩町小梨字大登	縄文	散布地
15	新堀館	千厩町小梨字大登	中世	城館跡
16	経塚	千厩町小梨字都沢	不明	経塚
17	金取沢Ⅰ	千厩町奥玉字金取沢	縄文	散布地
18	金取沢Ⅱ	千厩町奥玉字金取沢	縄文、弥生	散布地
19	金取沢Ⅲ	千厩町奥玉字金取沢	縄文	散布地
20	金取沢Ⅳ	千厩町奥玉字金取沢	縄文	散布地
21	深芦沢Ⅱ	千厩町奥玉字深芦沢	縄文	散布地
22	深芦沢Ⅲ	千厩町奥玉字深芦沢	縄文	散布地
23	深芦沢Ⅳ	千厩町奥玉字深芦沢	縄文	散布地
24	深芦沢Ⅴ	千厩町奥玉字深芦沢	縄文	集落跡
25	金田城（樋ノ口館）	千厩町清田字融夷、字卯南田	中世	城館跡
26	新地Ⅰ	千厩町清田字新地、字台	縄文	散布地
27	新地Ⅱ	千厩町清田字新地	縄文	散布地
28	新地Ⅲ	千厩町清田字台、千厩字上駒場	縄文	散布地
29	小天平館	千厩町清田字小天平、千厩字金山沢	中世	城館跡
30	清田台	千厩町清田字台、字鳥喰	縄文	散布地、集落跡
31	要害館	千厩町清田字要害、字桃園	縄文、中世、近世	集落跡、城館跡
32	清田境Ⅰ	千厩町清田字境、字市道	縄文、平安	散布地
33	桃園	千厩町清田字桃園	縄文	散布地
34	鳥喰Ⅰ	千厩町清田字鳥喰、字要害	縄文	散布地
35	鳥喰Ⅱ	千厩町清田字鳥喰、字要害	縄文	散布地
36	鳥喰Ⅲ	千厩町清田字鳥喰、字要害	縄文	散布地
37	コウドウボウ塚	千厩町清田字鳥喰	近世カ	塚
38	岩間Ⅰ	千厩町千厩字岩間	縄文	散布地
39	岩間Ⅱ	千厩町千厩字岩間	縄文	散布地
40	山寺跡	千厩町千厩字岩間	中世カ	社寺跡？
41	折戸館	千厩町千厩字下駒場	中世	城館跡
42	鳥羽Ⅰ	千厩町千厩字鳥羽	縄文	散布地
43	鳥羽Ⅱ	千厩町千厩字鳥羽	縄文	散布地
44	中長者Ⅰ	千厩町小梨字中長者	縄文	散布地
45	中長者Ⅱ	千厩町小梨字中長者	縄文	散布地
46	字南	千厩町小梨字字南、字長橋	縄文	散布地
47	経塚	千厩町小梨字長橋		経塚
48	ジョウカイ塚	千厩町千厩字鳥羽		塚
49	女ジョウカイ塚	千厩町千厩字鳥羽、小梨字館前		塚
50	木六館（黄鹿館）	千厩町千厩字上木六	中世	城館跡
51	上木六塚群	千厩町千厩字上木六、小梨字小山	近世カ	塚
52	鶴館	千厩町千厩字中木六、字下木六	中世	城館跡
53	三枚山鉾山	千厩町奥玉字吉立	近世、近代	生産遺跡
54	七日市一里塚	室根町矢越字大迎、字七日市	近世	一里塚
55	上折壁城	室根町矢越字千刈田	中世、近世	城館跡
56	二本木経塚	室根町矢越字二本木	近世	経塚
57	堀沢	室根町矢越字堀沢、字大洞	縄文	散布地
58	児屋館（鳥矢館）	室根町矢越字鳥矢森、字湯沢	中世	城館跡

表1 周辺の遺跡

2 近世の記録に見える清水馬場城

(1) 「古城書上」と地誌

清水馬場城やその城主に関する中世の史料は知られていないが、近世になると仙台藩領であった地域の中世城館を記録した史料として「古城書上」と総称される一連の史料が作成されるようになる。それらの性格や作成された時期については『仙台市史』特別編7城館（I 中世城館関係史料）で詳しく説明されている（仙台市史編さん委員会2006）。その中の一つ「仙台領古城書上」は延宝年間（1673～1681）に作成されたとみられるもので、領内21郡中536の古城を書き出し、磐井郡東山からは44の古城が取り上げられている。千厩地域では北小梨村の小梨城、中奥玉村の六一花城、金田村の金田城、南小梨村の小梨城、千厩村の千厩城、寺沢村の寺沢城、濁沼村の濁沼城、佛坂村の佛坂城とともに「清水馬場村 / 山 / 清水馬場城 同 十三間 十八間 城主千葉相模 / 二ノ丸 同 十五間 十五間」の記載があり、書出作成当時古城として周知された存在だったことが知られる。この書上と形式、内容ともにほぼ同様の史料として、享保13年（1728）の写しではあるが「仙台領古城書立之覚」がある。千厩地域の古城については「仙台領古城書上」よりやや詳しい内容となっている。

仙台藩では安永3年から4年（1774～1775）にかけて領内すべての村・浜に風土記書出の提出を命じており、本遺跡周辺では「上折壁村風土記御用書出」の古館の項に「一山吹城南北25間、東西20間、右ハ葛西家臣千葉右馬之丞様御居城ニ御座候處當郡釘子村清水馬場村浜横沢村下折壁村迄五ヶ村之旗頭と申伝候事」との記載があり、清水馬場村など五ヶ村は千葉右馬之丞を旗頭とする地域であったと記している。

(2) 伝来文書

葛西氏及びその家臣団に関わるものとして「葛西真記録」、「奥州葛西記」などいくつかの記録が知られている。特に葛西大崎一揆については、仕置軍に立ち向かった葛西遺臣の軍編成や合戦の経緯、そして敗北の様子など、確実な史料からは知ることができない内容が多く記載されていることでしばしば引用されている。これらについては「古城書上」などを引用して作成しているとの指摘もあり（本堂2005）、史料自体の有用性を含め詳細は不明である。

「葛西真記録」の中の「葛西御家臣衆座列」には、諸士之輩として「清水馬場修理 居住同郡（※本吉郡）清水」、総家臣次第不定として「千葉修理介 清水馬場館主/同苗（※千葉）相模 同（※岩井郡カ）清水馬場邑主」などの記載がある。また、「葛西氏合戦之記録」には、天正18年（1590）の豊臣秀吉による奥羽仕置軍に対し、二之備として桃生郡中津山香取（※神取）に出陣した葛西軍1700余騎の中に「清水馬場城主 同（※千葉）修理介家胤」の名がある。

陸前高田市の千葉氏所蔵「葛西大崎陣割ノ覚」（岩手県1961）には、天正19年（1591）、大原飛騨守信茂の六男清水馬場三河守忠胤が兄の千葉光胤、南小梨定胤、渋民国胤、長部頼胤とともに桃生郡深谷で謀殺され、忠胤の長子晴胤も殺害されたが二男重胤は逃れたと記している。紫桃正隆は「仙台領古城書上」や「仙台領古城書立之覚」に清水馬場城主と記される千葉相模は重胤であろうとしている（紫桃1990）。

（千葉）

3 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

令和5年(2023)9月13日、一関市千厩町清田字東沢34-2における個人住宅新築工事についての事前協議を、株式会社鈴佳と行った。この場所は、周知の埋蔵文化財包蔵地「清水馬場城」の範囲内にあたる。個人住宅新築工事には切土工事が含まれ、また一部樹木伐採も必要であることから、事前の試掘調査が難しく工事立会に対応することとした。

当初10月以降に工事着手するとのことであったが、工事が延期となり、令和6年(2024)3月21日に改めて事前協議を行った。その結果、南斜面を切土して整形するほか、住宅部分も切土を行うこと、工事は4月中旬から着手することが決まった。そこで、4月4日付埋蔵文化財発掘の届出を受理し、4月5日付教文第01003号文書により工事立会を指示した。

そして、4月24日から25日にかけて工事立会を実施し、南北、東西とも約12mの範囲を対象に遺構・遺物の有無を確認した。その結果、南側斜面の地山上に南北方向の溝跡1条を検出した。その一部を断ち割ったところ、断面の形状はV字形を呈するもので、住宅部分にも及ぶことが確認された。遺物は出土していないが、遺構は工事範囲全体に及ぶことが判明したため、工事中断と再協議を指示した。

4月26日に協議を行った結果、計画変更は難しく、遺跡の破壊が免れないこととなった。そのため、5月1日付埋蔵文化財発掘の届出を受理し、同日付教文02001号文書により発掘調査を指示した。

発掘調査は、5月2日から5月28日の期間で実施した。

(菅原孝明)

(2) 調査経過

- 5.2 機材搬入。
- 5.7 本調査開始。建物建設部分の表土除去。
法面部分で遺構検出作業を行うが攪乱が多い。
- 5.8 本日から作業員を導入し、遺構検出作業を実施。SD01周辺の柱穴状遺構はいずれも浅く、建物として組み合わない。本日の作業開始前、建物部分を対象とした地質調査が実施される。
- 5.9 法面部分でSD01の埋土除去作業に着手。
- 5.14 遺構実測のための基準点移動。
- 5.16 SD01の上層下部より動物遺体出土。
- 5.20 動物遺体の検出作業と清掃。
- 5.21 法面部分でSD01の埋土除去終了。動物遺体の精査を終了。
- 5.23 動物遺体取り上げ。SD01の土層断面図作成準備。
- 5.24 平板測量により調査区全体の平面図作成 (1/40) およびSD01の土層断面図作成に着手。
- 5.27 平面図と断面図の作成を終了。一部埋め戻しに着手。
- 5.28 埋め戻しを完了し、調査終了。



調査前の状況



SD01調査風景



SD01調査風景



SD01最下層から出土した礫



図6 調査区の位置

4 発見した遺構と遺物

(1) 層序

調査区は丘陵の東端部にあり、調査開始前、対象地区の南側は幅の狭い平場状の区画があり、その北側は宅地に続く平坦地となっていた。工事立会の際に行った調査において、平場状の区画は丘陵部を掘削した後に盛土で造成された地形であって、旧地形が大きく改変されていることが判明した。調査区南西隅周辺は丘陵の様相をとどめてはいるものの立木等の撤去で大きく攪乱を受け、南側の平坦地については、現代の陶磁器等を含む土層の下は風化した花崗岩層が厚く堆積する地山（註）となっており、その上面が遺構の確認面となっている。

(2) 発見した遺構

SD01溝跡 調査区中央部で発見した南北方向の溝である。地山（Ⅱ層）上面で発見した。調査区北端付近では北から約30度西に偏しており、それより7mの付近では約26度、調査区南端付近では12度西に偏している。

確認できた長さは約20mで、南北ともに調査区外に延びている。最も残存状況が良好な南端部で見ると上幅は約3.9m、底面は約6cm、深さ2.7mである。それ以外の部分では、上幅1.6～2.1m、底面付近は25～50cmである。底面は南側から北側に向かって傾斜し、比高差は約0.9mである（図8）。

断面の形状は概ねV字状を呈する。斜面上方の（図9）では漏斗状で上方が開いており、斜面下方の（図10）は、粗砂が堆積する底面付近の東壁が大きくえぐれている。

堆積土は調査区南端（図9）で29層、それより北側（図10～12）では11～26層に細分したが、土質や土色から1～5層に大別することができる。1層（図9、1～5層）は、調査区北側と南側でみられた黒色土である。拳大の礫や黄褐色土のブロックを含み、層厚は約75cmである。2層（図9、6～8層）は、調査区南端部（図9）でのみ確認できた黄褐色土で、浅い皿状に堆積しており、層厚は約30cmである。3層（図9、9～12層）は、調査区南端と中央部付近で確認した液状化に伴う噴砂の堆積層で、層厚は15～30cmである。その下層には幅4～7cmのオリーブ色に近い褐灰色細砂が下層の4層から噴出している状況がみられる（図12）。4層（図9、13～27層）は、溝全体に堆積しているもので、地山である花崗岩の崩壊土が主体となって褐色・灰黄褐色土が交互に堆積しており、粘性・締まりともに弱い。層厚は調査区南側で約140cm、それより北側では約40～120cmと全体に厚く堆積している。調査区北端部から約3m地点では、この層の上面から動物遺体（ウマ）が出土した。5層（図9、28層）は、溝全域で確認できた暗褐色粗砂層である。南端では層厚約10cm、北端では層厚約15cmで南側より北側に厚く堆積している。

(3) 出土遺物

本調査における出土遺物はきわめて少なく、SD01から動物遺体（ウマ）が1点出土した。4層の上位から頭部の右側を下にして出土したもので、大きな攪乱を受けた状況は見られない。残存する部位は保存状態は悪いが頭骨及び前後の四肢骨が揃った状態で出土した。詳細については「附章2 清水馬場城遺跡出土のウマ遺体」に記載している。

（菅原わかかな）

（註）調査区中央部の建物建設部分を対象とした地盤調査（スクリーウエイト貫入試験）において、5か所のポイントの内、「強反発」が確認されたのは最深で2.88m、そのほかは1.40～1.98mであり、おおよそ風化した花崗岩層の厚さと基盤層までの深さを示していると考えられる（提供：株式会社鈴佳）。

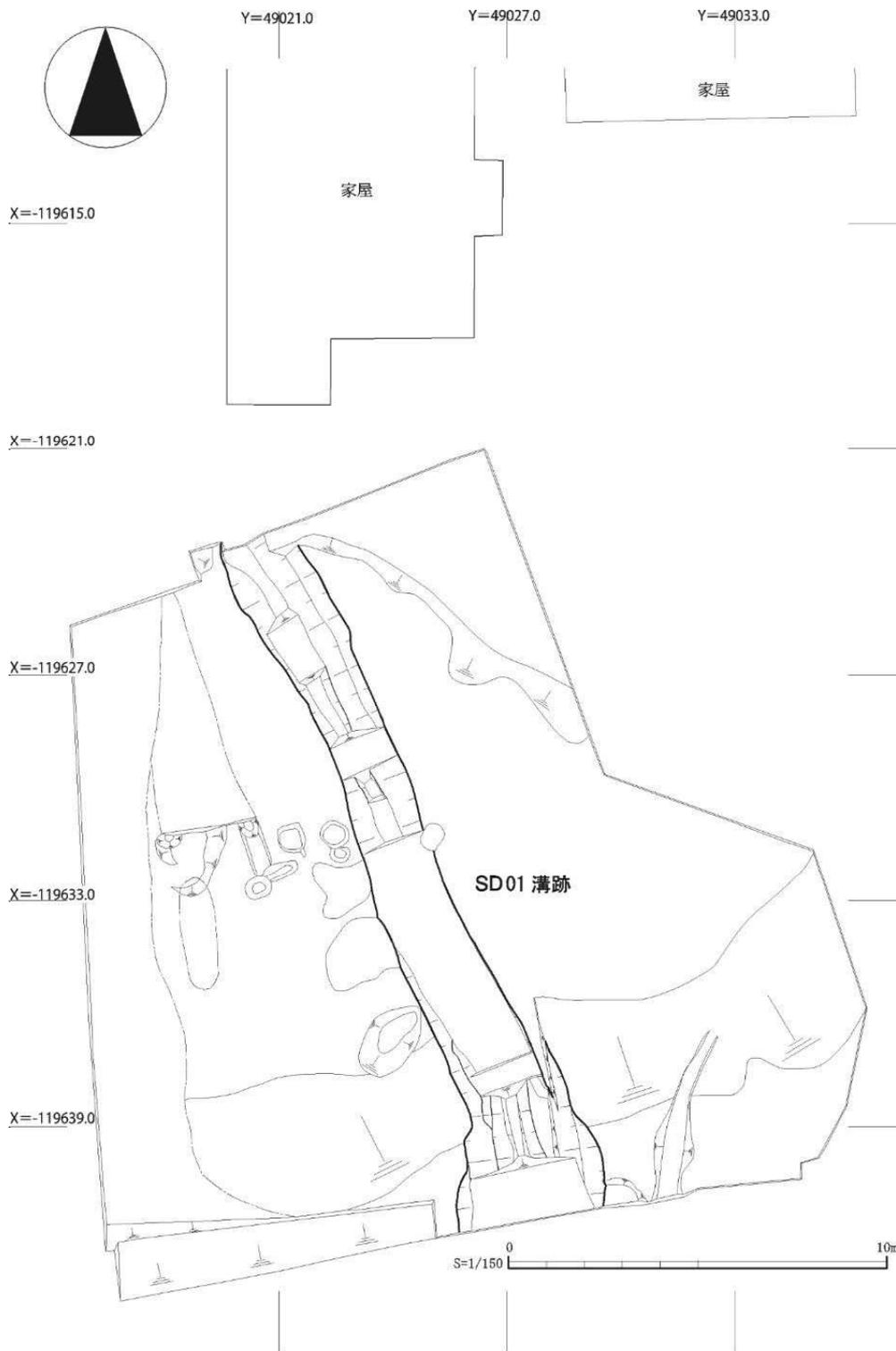
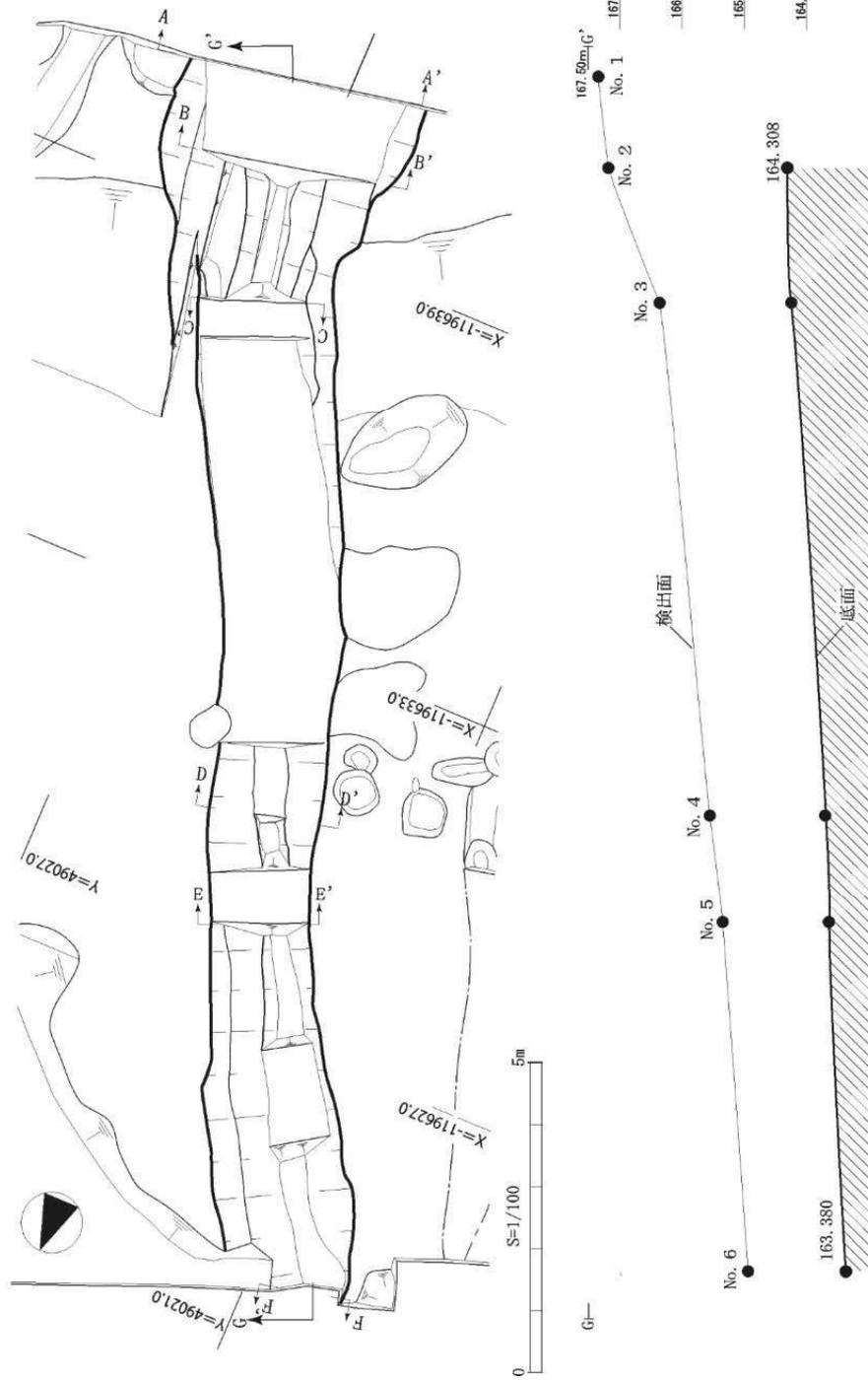


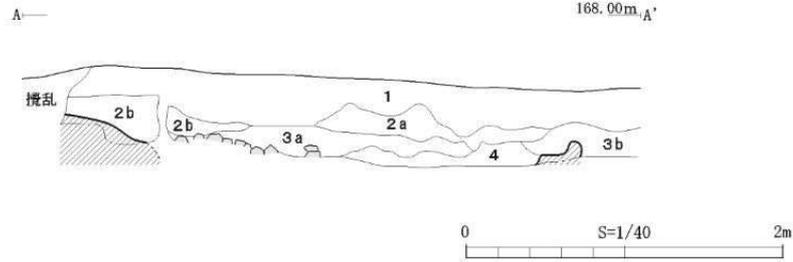
図7 調査区全体図



※No. 1～6は、断面図作成箇所を示す。

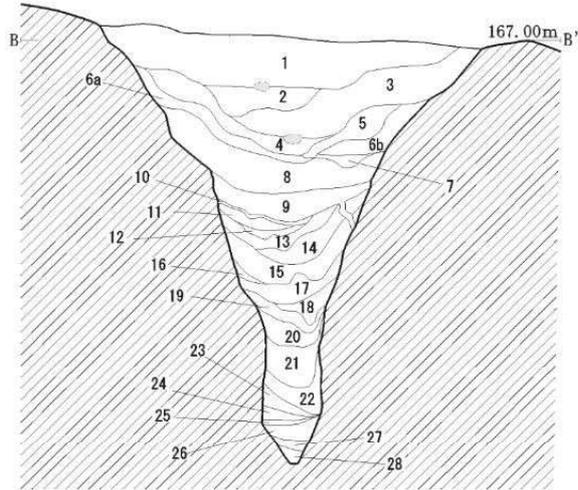
図8 SD01 溝跡縦断面 (S=1/100)

溝跡断面図 No. 1



層位	土色・土性	特徴	層位	土色・土性	特徴
1	10YR3/4暗褐色土	締まり・粘性ややあり。φ 2～5mmの黄褐色粒を含む。	3a	10YR3/2黒褐色土	締まり・粘性ややあり。粒子やや粗い、黄褐色粒を含む。下層に準大の礫を多量に含む。
2a	10YR5/6黄褐色土	締まりあり。粘性なし。粒子粗い、黄褐色土がブロック状に入る。	3b	10YR4/3い黄褐色土	締まり・粘性なし。粒子やや粗い。φ 2～5mmの黄褐色粒を少量含む。
2b	10YR2/2黒褐色土	締まりなし。粘性ややあり。φ 3～5mm礫を微量に含む。木根を含む。	4	10YR2/2黒褐色土	締まり・粘性ややあり。木根を多く含む。

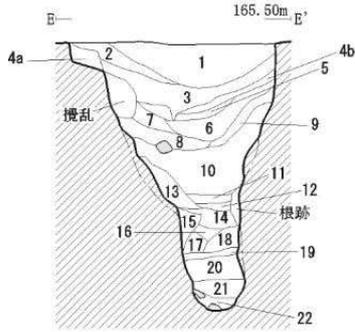
溝跡断面図 No. 2



層位	土色・土性	特徴	層位	土色・土性	特徴
1	10YR2/2黒褐色土		15	10YR6/7明黄褐色土	黒色の鉱物や灰白色土を多く含む。
2	10YR2/2黒褐色土		16	2.5Y8/2灰白色土	地山の崩壊土で、黒色の鉱物を含む。
3	10YR2/2黒褐色土		17	10YR6/6明黄褐色土	砂を多く含む。
4	10YR3/4暗褐色土	10YR5/6黄褐色土を含む。	18	10YR6/7明黄褐色土	黒色の鉱物や灰白色土を多く含む。
5	10YR3/4暗褐色土		19	10YR6/7明黄褐色土	黒色の鉱物や灰白色土、明褐色土を多く含む。
6a	10YR5/6黄褐色土		20	10YR6/7明黄褐色土	黒色の鉱物や灰白色土を多く含む。
6b	10YR5/6黄褐色土	8層 (10YR5/6黄褐色土) と似ているが崩壊土の粒子が細かい。	21	10YR6/6明黄褐色砂	白色粒 (地山) を含む。
7	2.5Y6/2灰黄色砂		22	10YR6/6明黄褐色砂	粒子が細かい白色粒 (地山) を含む。
8	10YR5/6黄褐色土	地山の崩壊土を多量に含む。	23	2.5Y6/3黄褐色砂	
9	10YR5/3にぶい黄褐色細砂	最上層にはやや粘性を帯びた10YR4/2灰黄褐色土が堆積、中頃には灰色の中砂が8cmの厚さで堆積。	24	10YR4/3にぶい黄褐色細砂	
10	10YR4/2灰黄褐色土	やや粘性あり。	25	2.5Y5/3黄褐色砂	
11	2.5Y4/4オリーブ褐色砂	粒子の大きいガラス質のものや2.5Y8/6黄褐色土のブロックを含む。	26	2.5Y6/6明黄褐色砂	
12	10YR5/6黄褐色土	黄色土の小ブロックを含む。	27	10YR4/3にぶい黄褐色砂	
13	2.5Y4/4オリーブ褐色砂	7.5YR3/2黒褐色土ブロックを多く含む。	28	5Y5/2灰オリーブ砂	粗砂層
14	10YR6/6明黄褐色土	砂を多く含む。			

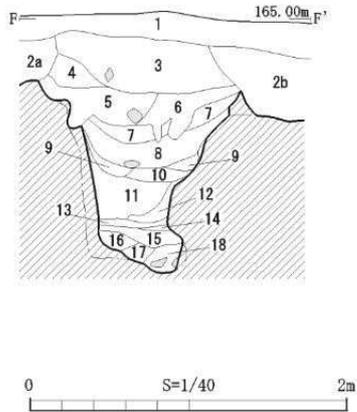
図9 SD01 溝跡断面図 No. 1、No. 2 (S=1/40)

溝跡断面図 No. 5



層位	土色・土性	特徴
1	10YR3/1黒褐色土	締まりあり。粘性ややあり。拳大の礫を多量に含む。
2	10YR5/4にぶい黄褐色土	締まりなし。粘性なし。粒子粗い。
3	10YR3/3暗褐色土	締まりややあり。粘性ややあり。φ2～5mmの黄褐色ブロックを含む。
4	10YR5/8黄褐色土	締まりややあり。粘性なし。
5	10YR5/4にぶい黄褐色土	締まりなし。粘性なし。粒子やや細かい。
6	10YR3/1黒褐色土	締まりややあり。粘性ややあり。φ5mmの礫を少量含む。
7	10YR5/3にぶい黄褐色土	締まりややあり。粘性なし。粒子やや細かい。
8	10YR5/4にぶい黄褐色土	締まりややあり。粘性なし。
9	10YR5/6黄褐色土	締まりなし。粘性なし。粒子粗い。
10	10YR5/3にぶい黄褐色土	締まりややあり。粘性なし。
11	10YR6/3にぶい黄褐色土	締まりなし。粘性なし。
12	10YR5/6黄褐色土	締まりややあり。粘性なし。粒子やや細かい。粒子粗い。
13	10YR6/4にぶい黄褐色土	締まりなし。粘性なし。粒子やや細かい。
14	10YR3/4暗褐色土	締まりなし。粘性なし。
15	10YR8/2灰白色土	壁面(地山)の崩壊土。
16	10YR6/3にぶい黄褐色土	締まりなし。粘性なし。
17	10YR5/6黄褐色土	締まりややあり。粘性なし。粒子粗い。
18	10YR4/6褐色土	締まりなし。粘性なし。
19	10YR4/1褐灰色砂泥	締まりなし。粘性ややあり。20層と近似。
20	10YR5/8黄褐色土	締まりあり。粘性ややあり。拳大の礫を多量に含む。粘性なし。粒子粗い。
21	10YR5/1褐灰色砂泥	締まり・粘性なし。粒子細かい。下層に拳大の礫をわずかに含む。
22	10YR4/3にぶい黄褐色土	締まりなし。粘性なし。φ5cmの礫をわずかに含む。

溝跡断面図 No. 6

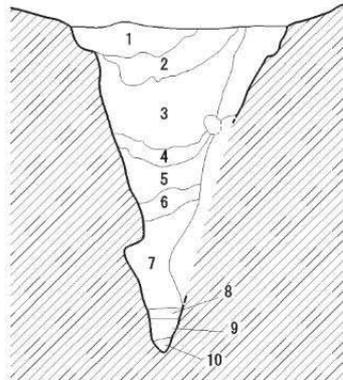


層位	土色・土性	特徴
1	10YR3/3暗褐色土	表土。締まりあり。粘性なし。
2a	10YR3/4暗褐色土	締まりあり。粘性ややあり。拳大の礫を少量含む。
2b	10YR3/4暗褐色土	締まりあり。粘性ややあり。拳大の礫を少量含む。
3	10YR3/2黒褐色土	締まりあり。粘性ややあり。拳大の礫を少量含む。
4	10YR3/4黒褐色土	締まりややあり。粘性なし。
5	10YR4/2灰黄褐色土	締まりややあり。粘性なし。拳大の礫をわずかに含む。
6	10YR4/1褐灰色土	締まり・粘性ややあり。
7	10YR5/6黄褐色土	締まり・粘性ややあり。粒子やや粗い。
8	10YR3/4暗褐色土	締まり・粘性ややあり。φ2～5mm礫を少量含む。黄褐色土がブロック状に入る。
9	10YR5/4にぶい黄褐色土	締まり・粘性なし。粒子やや細かい。
10	10YR3/3暗褐色土	締まりなし。粘性ややあり。
11	10YR5/3にぶい黄褐色土	締まり・粘性なし。粒子粗い。
12	10YR3/2黒褐色土	締まり・粘性なし。
13	10YR5/4にぶい黄褐色土	締まり・粘性なし。粒子粗い。
14	10YR4/2灰黄褐色土	締まり・粘性なし。粒子細かい。
15	10YR5/4にぶい黄褐色土	締まり・粘性なし。粒子粗い。
16	10YR4/1褐灰色土	締まり・粘性なし。粒子粗い。
17	10YR2/1黒色土	締まり・粘性なし。粒子細かい。
18	10YR5/1褐灰色砂泥	締まり・粘性なし。粒子細かい。下層に拳大の礫をわずかに含む。

図 10 SD01 溝跡断面図 No. 5、No. 6 (S=1/40)

溝跡断面図 No. 3

C— 166.70m C'

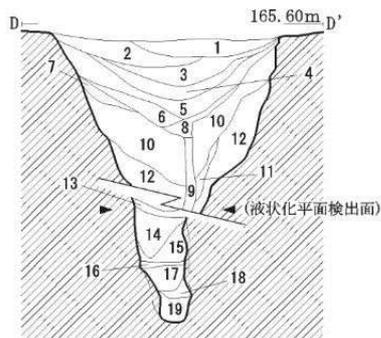


層位	土色・土性	特徴
1	10YR4/2灰黄褐色土	締まりあり。粘性ややあり。準大の礫を少量含む。
2	10YR4/4褐色土	砂を多く含む。
3	10YR2/2黒褐色土	やや粘性のある10YR4/6褐色土の大小のブロックを多く含む。断面No.2 (図9)の15層に相当。
4	10YR6/6明黄褐色土	断面No.2 (図9)の16層以下に対応。
5	10YR6/7明黄褐色土	
6	10YR5/8明黄褐色土	断面No.2 (図9)の27層に対応。
7	2.5Y6/6明黄褐色砂	
8	10YR4/3にぶい黄褐色砂	9層の粗砂を含む。
9	10YR4/4にぶい黄褐色砂	断面No.2 (図9)の28層に対応。
10	5Y3/2灰オリープ粗砂	

0 S=1/40 2m

図11 SD01 溝跡断面図 No. 3 (S=1/40)

溝跡断面図 No. 4



層位	土色・土性	特徴
1	10YR3/1黒褐色土	締まりややあり。粘性なし。礫含む。
2	10YR3/2黒褐色土	締まりややあり。粘性なし。粒子粗い。
3	10YR4/3にぶい黄褐色土	締まりなし。粘性なし。粒子粗い。φ1~2mmの小礫を多く含む。
4	10YR4/2灰黄褐色土	締まりややあり。粘性ややあり。
5	10YR5/3にぶい黄褐色土	締まりややあり。粘性なし。粒子やや粗い。花崗岩ブロックを約5%含む。
6	10YR4/2灰黄褐色土	締まりややあり。粘性ややあり。
7	10YR2/1黒色土	締まりややあり。粘性なし。粒子や粗い。φ10mmの黄褐色ブロックを少量含む。
8	10YR4/1褐灰色土	締まりなし。粘性ややあり。
9	10YR4/1褐灰色土	締まりややあり。粘性ややあり。
10	10YR5/6黄褐色土	締まりややあり。粘性ややあり。花崗岩主体。西側はやや酸化。
11	5YR3/4暗赤褐色	締まりなし。粘性なし。粒子粗い。φ1~2mmの小礫を多く含む。
12	10YR5/3にぶい黄褐色土	締まりややあり。粘性なし。粒子やや粗い。花崗岩ブロックを多く含む。
13	7.5YR4/3褐色土	締まりなし。粘性ややあり。粒子粗い。
14	10YR5/3にぶい黄褐色土	締まりなし。粘性なし。粒子細かい。
15	10YR4/3にぶい黄褐色土	締まりなし。粘性なし。粒子粗い。
16	10YR4/1褐灰色土 褐灰色砂	締まりなし。粘性なし。砂質土。
17	10YR5/6黄褐色土	締まりなし。粘性なし。粒子粗い。
18	10YR4/6褐色土	締まりなし。粘性なし。
19	10YR5/1褐灰色砂岩	締まりなし。粘性なし。砂質土。下層に準大の礫を少量含む。

0 S=1/40 2m

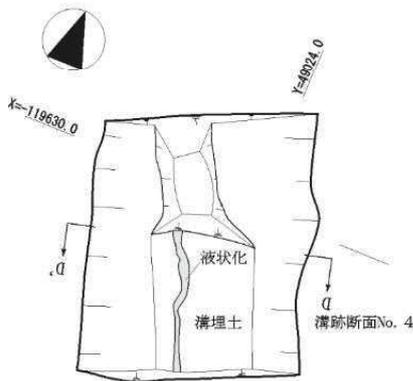


図12 SD01 溝跡平面・断面図 No. 4 (S=1/40)

5 調査成果のまとめ

今回の調査で発見した遺構は南北方向の溝1条である。調査区が位置する清水馬場城北東部の構造が明確でない状況においてこの遺構の性格を明らかにすることは難しいが、確認できた事実に基づき若干の考察を行いたい。

遺構の性格 この溝は、調査区南壁付近が上幅3.9m、深さ2.7mであるのに対し、それより北側にかけては上幅1.9～2.1m、深さ1.5～2.1mとなっている。後者は下半部の形状が前者にほぼ共通すること、底面は南側から北側にかけて自然な傾斜がみられること（図8）、検出面が現代の攪乱層であるI層に直接覆われていることなどから、調査区南壁付近以外は地形が大きく改変されていると考えられる。

残存状況が最も良好な南壁付近でみると、SD01は上幅に対し下半部の幅が狭く、下半部は壁が垂直気味に立ち上がっている。上幅に対して深さの割合は10：7であるが、下半部が狭い漏斗状の形状（図9）は排水や単なる区画を目的とした溝とは考え難く、防御的な要素を想定することができる。堆積土は東西いずれの方向からも強く流れ込んだ状況はみられないことから、土塁のような施設が存在した可能性は低いと考えられる。

粗砂の自然堆積層である5層はこの溝が機能していた時期に底面に堆積したものとみられるが、地山の崩壊土である4層やそれより上層はこの溝の維持管理が滞っている状況を示すものであり、城館としての機能を失った時期の堆積土と考えられる。

遺構の年代 遺構の年代についてはそれを直接示す資料が出土していないため明確ではないが、昭和58年に千厩町教育委員会が実施した発掘調査では、地元で「大手門」と呼ばれる地区から整地層や複数の掘立柱建物を発見し、瀬戸・美濃産の灰釉丸皿や中国明代の青花皿などが出土している（附章1参照）。灰釉丸皿は大窯の製品で、その操業した時期は1480年代までさかのぼると考えられている（藤澤1986）。青花皿は2点あり、端反りの口縁部破片（「附章1」図2-1）は外面に宝相華唐草文が描かれた皿で、天正元年（1573）に織田信長によって滅ぼされた朝倉氏の拠点一乗谷朝倉氏遺跡から器形、文様ともほぼ一致する資料が出土しており（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館1993・1995）、15世紀後半から16世紀後半頃の年代が考えられている（小野1982）。山梨県の新巻本村ではこのような青花皿が青磁碗、灰釉皿とともに常骨焼の甕に納められて一括で出土した事例がある（小野1981、山梨県2004）。この灰釉皿は古瀬戸後期様式の最終段階のもので、この様式は京都の臨川寺や静岡県勝間田城の調査成果から1460年代に成立し、1476年までは存続したと考えられており（藤澤1995）、青花皿（口縁部破片）の年代が15世紀後半を含む時期にあることがわかる。底部破片（「附章1」図1-2）は断面方形の高台が付くもので、口縁部が外反せず内湾する形状の皿に類似している。小野正敏の研究（小野1982）では「附章1」図2-1の皿より少し遅れて現れる一群と考えられている。このような皿は、小田原北条氏の拠点八王子城から類似したものが出土している。この城は天正年間（1573～1592）に築城が開始されたと考えられており、天正18年（1590）に豊臣秀吉方の攻撃によって落城したことから存続期間が短く、出土遺物は16世紀末頃に位置づけられている（八王子市教育委員会2002）。

以上のように、昭和58年度調査区から出土した国産の灰釉皿と中国産の青花皿の年代は15世紀後半から16世紀後半であり、天正18年（1590）の奥羽仕置によって、清水馬場城も葛西氏領内のほかの城館と運命を共にしたと考えられることから、城館として機能した年代の下限は天正18年（1590）とすることができる。

清水馬場城が機能していた時期の遺構とみられる溝1についても同様の年代と考えておきたい。

出土遺物 遺物はSD01から動物遺体が1点出土した。体高約110cmの小型馬で、年齢が18歳を超える老齢の雌と推定され、大きさからみて駄馬、農耕馬として使用されたものとみられるという(附章2)。年代は、SD01の半ばまで堆積した4層の上位で検出したことから16世紀後半以降と考えられ、詳細は不明であるが清水馬場城に関わる可能性は低いとみられる。しかし本遺跡周辺において中・近世のウマ遺体が良好な状態で検出されたという報告例はなく、本資料はこの地域における馬の良好な資料と考えられる。安永4年(1775)に作成された磐井郡東山南方や北方の村の「風土記御用書出」には、家数や人数に対して多くの馬の数が記されている(表2)。SD01出土のウマ遺体は当時の馬の実像を示す希少な情報を提供するものとなる。

村名	地域名	家数	人数		馬	村名	地域名	家数	人数		馬		
			男	女					男	女			
千厩村	千厩町	391	1962	1087	875	282	曾慶村	大東町	264	1262	692	570	260
濁沼村	千厩町	102	539	299	240	76	摺沢村	大東町	367	1783	982	801	291
佛坂村	千厩町	5	308	159	149	59	長坂村	東山町	333	1689	925	764	260
上奥玉村	千厩町	145	688	369	319	111	(生出)	東山町	165	796	437	359	136
中奥玉村	千厩町	115	531	295	236	120	田河津村	東山町	245	1511	761	750	320
下奥玉村	千厩町	93	463	247	216	102	釘子村	室根村	200	921	504	417	275
北小梨村	千厩町	253	1168	626	542	183	上折壁村	室根村	146	723	388	335	119
南小梨村	千厩町	142	588	317	271	117	下折壁村	室根村	271	1337	707	630	348
熊田倉村	千厩町	90	387	201	186	84	大籠村	藤沢町	135	724	412	312	140
金田村	千厩町	49	246	133	113	53	保呂羽村	藤沢町	161	861	470	391	136
寺沢村	千厩町	88	419	224	195	68	藤澤本郷	藤沢町	318	1717	928	789	268
薄衣村	川崎村	375	1959	1061	898	251	砂子田村	藤沢町	106	517	297	220	65
門崎村	川崎村	215	1135	631	554	83	新沼村	藤沢町	57	286	153	133	33
築館村	大東町	154	795	429	366	90	西口村	藤沢町	118	713	402	311	108
天狗田村	大東町	64	420	230	190	76	黄海村	藤沢町	485	2581	1426	1155	366
猿沢村	大東町	297	1556	843	713	307	徳田村	藤沢町	190	891	489	402	146

表2 旧東磐井郡内の家数・人数と馬

以上のことをまとめると次のとおりである。

- (1) 清水馬場城の北東部において南北溝SD01を1条発見した。
- (2) SD01は城の北東部に設けられた防御性を帯びた施設の可能性がある。
- (3) SD01の年代は15世紀後半から16世紀後半頃と考えられる。
- (4) 中世から近世にかけてのウマ遺体は、本遺跡周辺における馬の実態を示す資料である。

(千葉)

参考文献

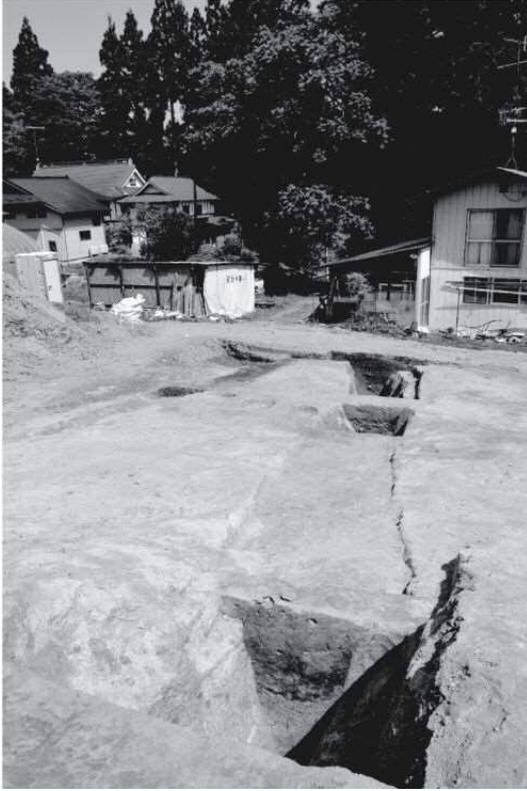
- 一関市教育委員会2020『上折壁城遺跡発掘調査報告書—住宅新築工事に伴う発掘調査—』岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第28集
- 岩手県1961「第5章 秀吉の国内統一」『岩手県史』第3巻中世篇下
- 岩手県1974『北上山地開発地域 土地分類基本調査 千厩』
- 岩手県教育委員会1980『岩手県「歴史の道」調査報告 気仙沼街道』岩手県文化財調査報告書第40集
- 岩手県教育委員会・日本道路公団1981「大瀬川C遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-VIII-(大 瀬川A～C遺跡)』岩手県文化財調査報告書第57集
- 岩手県教育委員会1986『岩手の城館跡』岩手県文化財調査報告書第82集
- 岩手県教育委員会2001『岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成12年度)』岩手県文化財調査報告書第112集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2001『要害館跡発掘調査報告書 ふるさと農道緊急整備事業要害地区関連発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第386集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2003『清田台遺跡発掘調査報告書 ふるさと農道緊急整備要害地区関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第412集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2008『平成19年度発掘調査報告書(清田境I遺跡)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第524集
- 小野正敏1981「山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.1
- 小野正敏1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
- 紫桃正隆1972「清水馬場城」『仙台領内古城・館』第1巻
- 紫桃正隆1990「清水馬場氏」『戦国大名 葛西氏家臣団事典』
- 千厩町史編纂委員会1999『千厩町史』第1巻 自然編 歴史編 特別編
- 仙台市史編さん委員会2006『仙台市史』特別編7
- 竹内誠・御子柴(氏家)真澄2002『千厩地域の地質(地域地質研究報告:5万分1地質図幅;秋田(6)第61号)』
- 東京国立博物館1978『日本出土の中国陶磁』
- 畠山篤雄1985「千厩折戸館発掘調査報告」『東磐史学』第10号
- 八王子市教育委員会2002『八王子城跡XIII 八王子城跡御主殿発掘調査報告書』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館1993『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告IV』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館1995『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告V』
- 藤澤良祐1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』
- 藤澤良祐1991「瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』
- 本堂寿一2005「『葛西真記録』の史料としての信憑性について」北上市博物館研究報告 第15号
- 宮城県史編纂委員会1959『宮城県史』27 資料編5 風土記 西磐井郡 東磐井郡 気仙郡
- 山梨県2004「新巻本村出土陶磁器」『山梨県史』資料編7 中世4考古資料



縮尺 1/5000

調査区周辺航空写真

写真図版 2



1 SD01検出状況（南より）

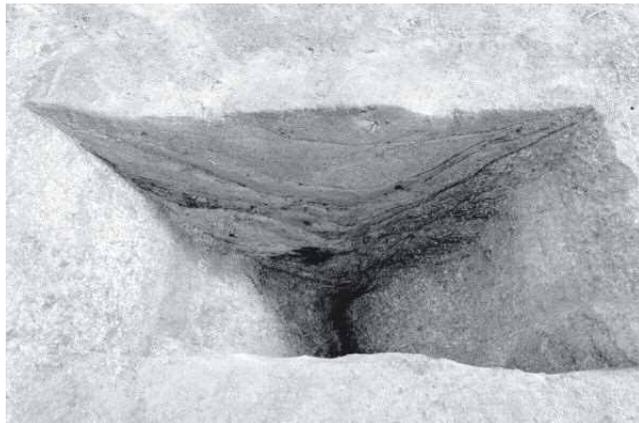


2 同上（北より）

1 SD01北東部から見た
清水馬場城の曲輪
(木立の奥の平坦な部分)



2 SD01土層堆積状況



3 SD01堆積土中の液状化



写真図版 4



1 ウマ遺体出土状況



2 頭部



3 前歯



4 前歯



5 肩甲骨

附章1 大手門地区の調査

1 調査に至る経緯と経過

昭和58年(1983)町道大登線の改良工事が計画され、拡幅の範囲が清水馬場城跡の西辺(本書「3 調査に至る経緯と経過」参照)に及ぶことが判明した。このことから、町道工事の担当課である建設課と確認調査の実施に向けて度々協議を重ね、確認調査の実施に至った。調査を進めるにしたがって遺構が当初予定した範囲の西側にも広がっている状況が確認できたことから、南北約14m、幅約2.5mを拡張し、最終的な調査範囲は、工事により削平される箇所と道路敷となる東西約30m、南北約105m(約3,150m²)の範囲となった。遺構はさらに西側に伸びていたが、道路を完全に封鎖できず、調査を断念した。

対象地区の現況は、畑、原野、公衆用道路であり、調査区北側の山の上は、かつて近代以降に設置された火の見櫓があった。中央低地の畑地は地元で「大手門」呼ばれ、比較的広さが確保出来る場所である。調査区の南側には、空堀の開口部や土塁状の高まりが道路に面して目視できる状況である。調査区の西側は幅約35mの水田が南北方向に延びており、かつては沢の地形を利用した泥湿田ではなかったかと推測される。調査区内も下層まで掘り下げると湧水の多い強い場所であった。現地の調査は昭和58年(1983)10月初旬から～11月末にかけて断続的に行った。

確認調査は調査区を大きくⅠ区、Ⅱ区の二つに分けて実施した(図1)。

Ⅰ区は北側の高所の畑であり、周囲は急峻な崖となっている。表土(耕作土)直下から、火の見櫓の柱の痕跡と推定される深い掘り込みや性格不明の小平場を検出した(写真図版3-1)。それらの検出面は花崗岩の風化土(真砂土)である。

Ⅱ区は丘陵裾部に広がる低地で、その場所を利用した畑の法面は町道と接している。畑の中央部の畝尻で町道との比高差は0.5～2.5mであり、南側に行くほど比高差が大きくなっている。Ⅱ区では空堀の開口部はトレンチ3の南東部で二箇所確認できる。部分的に自然崩落が見られた。内側の空堀の下の畑は、今回の工事計画には含まれない高い平らな畑地である。トレンチ3では遺構を確認できなかったため、調査の対象箇所を低地中央部の平らな畑(トレンチ1・2の間)を中心とした。また、低地の北側周辺は工事施工区外であったが、トレンチ1・2を設定して遺構確認を行ったが、トレンチの東側では遺構を確認できなかったため、地権者の了解を得て調査期間中の廃土置き場として使用した。

2 発見した遺構と遺物

(1) 発見した遺構

整地層 町道に面した低地において、表土(畑の耕作土)下0.4～0.7mで整地層を発見した。掘立柱建物を検出した面の上にぶい黄褐色砂質土を主体とする土で整地したもので、東側(丘陵部側)から西側(低地)にかけて厚くなっている。層自体は二つの層に区分できるが、時期差か積み手の違いかは明らかにできなかった。整地層中から中国明代の青花皿が出土している(図2-2)。

掘立柱建物跡 町道に面した畑地の地表下0.4～0.7mに整地層があり、その上面で掘立柱建物の柱穴と見られる遺構を確認した。調査区を南北方向に拡張して検出作業を行ったところ、柱穴を14基確認し、建物として組み合う柱穴が調査区の西側にも及んでいるため、工事担当課と協議して調査期

間を延長し、西側に約3m、南北方向に約14m拡張したところ、新たに7基の柱穴を発見した。それらの一部掘り下げたところ、柱痕跡が残っているものも多く見られ、柱根が残っているものもあった。規模は不明であるが、柱穴の並びから複数の建物が重複している状況がみられた。その内の1棟は東西2間以上、南北4間以上の建物と考えられ、東側の工事施工区外にも及んでいると推定される(写真図版4)。道路側に拡張した調査区の土層断面から、柱穴の検出面は整地層上面であることが確認できた。

溝状遺構 溝状遺構は2条確認した。いずれも調査区外に延びている。溝1はⅡ区北側の東西に伸ばしたトレンチ端で発見した南北溝であり、丘陵斜面の裾郭に沿って周っている。道路施工区外のため詳細は不明である。溝2はⅡ区の掘立柱建物跡の南側で発見した東西方向の溝である。

(2) 発見した遺物

表土及び整地層から陶磁器、角釘、性格不明の鉄片が少数出土した。中世の遺物としては瀬戸・美濃産の灰釉丸皿が1点、中国明代の青花皿が3点、鉄釘などが出土している。丸皿は底部付近の破片で、内外両面に灰釉が施されている特徴から大窯の製品とみられる。青花皿は口縁部と底部の破片が各1点ある。1は口縁部が端反りとなる皿で、口径は10.4cmに復元できる。外面には宝相華唐草文、内面には二重の圏線が描かれている(図2-1)。岩手県内では大瀬川C遺跡(岩手県教育委員会・日本道路公団1981)で口縁部の形態や体部の文様がほぼ一致する資料が出土している(図2-3)。2は角高台がつく皿の底部破片である(図2-2)。内面底部に植物の葉が、高台際には圏線が描かれている。高台内には底部を回転ヘラ削りで仕上げた際に生じた同心円状の工具痕が残っている。これらの年代については、一乗谷朝倉氏遺跡や八王子城跡の調査成果を参考にすると、15世紀後半から16世紀後半頃と考えられる(本書「5 調査成果のまとめ」参照)。

(島山)

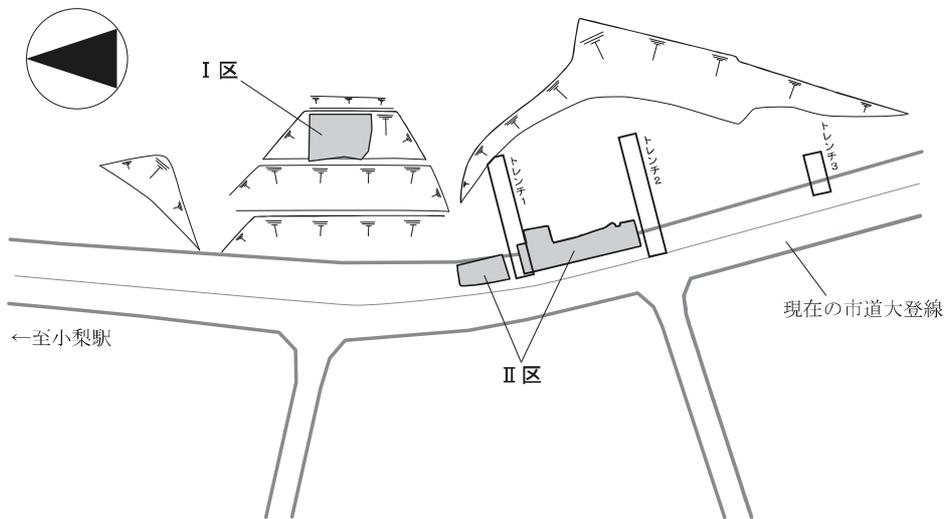
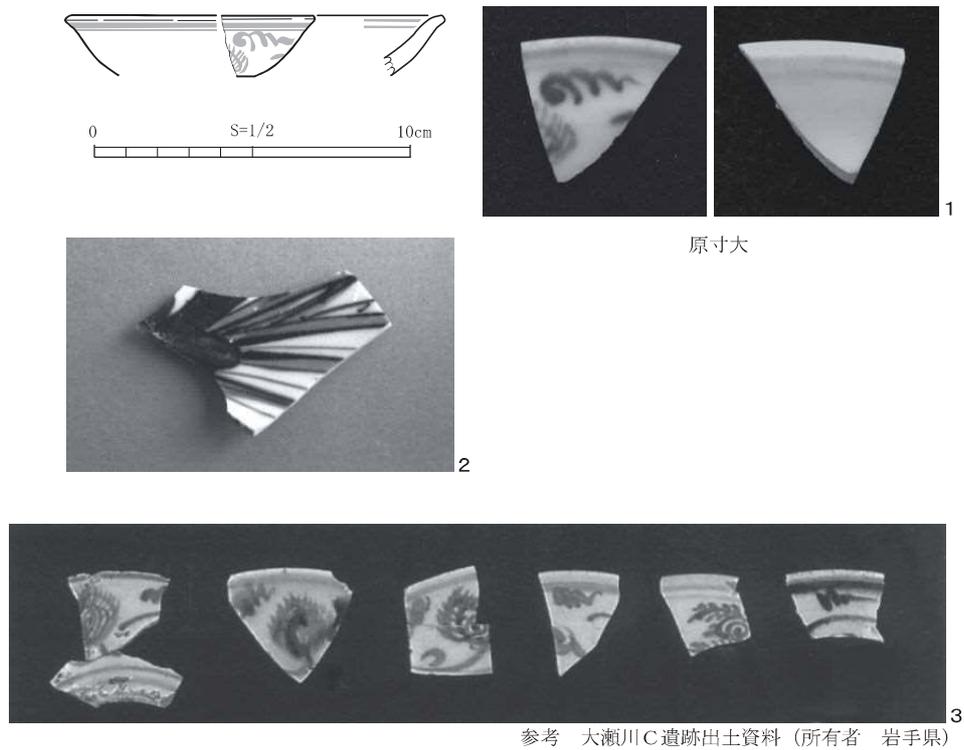


図1 昭和58年度調査区配置図



参考 大瀬川C遺跡出土資料 (所有者 岩手県)

図2 昭和58年度出土遺物

写真図版 1



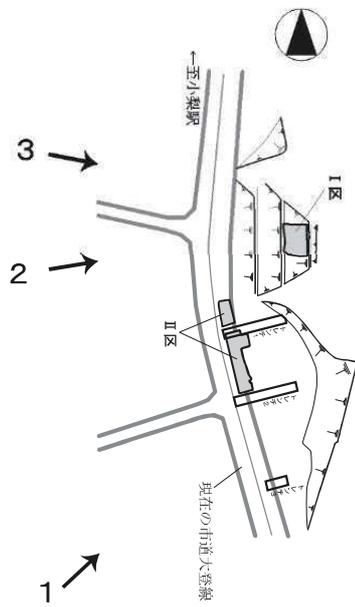
1 清水馬場城遺跡空中写真（西側上空より）『千厩町史』第1巻より転載 昭和55年12月撮影



2 調査区遠景（西より）



1 調査区遠景（南西より）

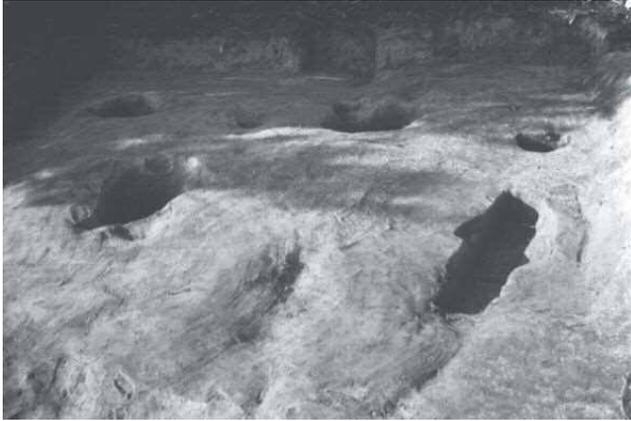


2 調査区遠景（西より）



3 同上

写真図版 3



1 I区全景（西より）



2 II区調査状況（I区より）



3 I区調査風景



4 II区調査風景

1 II区堀立柱建物跡
(東より)



2 同上 (北より)



3 同上 (北東より)



写真図版 5



1 II区整地層（東より）



2 同上



3 同上



1 II区重複する柱穴



2 整地層に覆われる柱穴



3 II区柱根が残る柱穴



4 柱根



5 柱痕跡がある柱穴



6 同左



7 整地層から出土した青花



8 同左 (図2-2)

附章2 清水馬場城跡出土のウマ遺体

菅原弘樹（奥松島縄文村歴史資料館）

1 はじめに

清水馬場城遺跡の調査で、SD01溝跡から1体分のウマの骨がまとまって出土した。年代的には、城の廃絶後の堆積土から検出されていることから16世紀後半以降のものと推定される。

以下、ウマ遺体の出土状況および体高、年齢、雌雄等形態的な特徴について述べる。同定にあたっては、鹿児島大学農学部家畜解剖学研究室所蔵の御崎馬の現生骨格標本（No. 12、雌）を使用し、骨の計測はDrisch（1976）に従った。

2 出土状況

出土した骨は脆弱で保存状況が悪く、全体の形状を留めるものは少ない。実際に同定できた資料は表1に示した19点のみである。ただし、頭蓋骨、左右の下顎骨、左肩甲骨、前肢の左右上腕骨・橈尺骨、左手根骨、左指骨、後肢の右脛骨、左中足骨が検出され、頭骨および前後の四肢骨がほぼ揃って確認された。



写真1 ウマ遺体の出土状況

また、検出時の状況（写真1）を見ると、埋葬されたような堆積状況にはないものの、頭骨（頭蓋骨・下顎骨）から頸椎（環椎・第2～6

頸椎）にかけて関節し、肩甲骨もほぼ解剖学的な位置を留めた状態で出土している。四肢骨の出土状況および解体痕跡の有無については確認できなかったが、少なくとも頭首については、右側を下にして繋がった状態で出土しており、大きな攪乱を受けた状況は認められていない。

3 出土したウマの特徴

同定した骨はそのほとんどが関節部のみで、しかも計測可能な部位も限られるため、各部位骨の詳細な観察や相互のペアリングの確認は難しい状況にあるが、左右の重複や関節部から想定される骨の大きさに矛盾はなく、検出状況からみて、これらは同一個体で1個体分のウマ遺体の可能性が高いと考えられる。

遺跡出土のウマの大きさについては、完存資料が少ないため、西中川ほか（2020）による各部位の部分計測値から骨長を求め、林田・山内（1957）の骨長にもとづく体高推定式により体高（地面から肩までの高さ）が推定され、在来馬との比較や遺跡間での比較が行われている。本資料については関節部の摩滅欠損や表面の荒れが著しく、精確な計測および体高の推定は難しいが、下顎骨臼歯列長 P_2-M_3 および前肢基節骨全長GLをもとにおおよその体高を推定すると、それぞれ112.8cm、112.0cmであった。



写真2 下顎前歯の咬耗状況



写真3 下顎第2前臼歯
（銜痕なし）

年齢については、下顎前歯（切歯）の咬耗が著しく、切歯咬耗面は長三角形を呈し、歯星は四方形をなしており、久合田（1943）によれば18歳を超える個体と推定される（写真2）。雌雄については、犬歯がないことから雌の個体と考えられる。また、下顎第2臼歯の前縁部に、ハミ（銜）を噛ませた際に生じるエナメル質の平滑化が認められない（写真3）ことから、乗馬用ではなく主に駄馬、農耕馬として使用されたものとみられる。

No.	部位	左右	残存部位	計測値等
1	頭蓋骨	LR	ほぼ全体（部分的に欠損）	頭蓋骨・臼歯列長計測不可、切歯（I ¹ ~I ³ ）残存
2	下顎骨	LR	ほぼ全体（部分的に欠損）	下顎骨計測不可、臼歯列長P ₂ -M ₃ 142.8mm、切歯（I ₁ ・I ₂ ）残存
3	肩甲骨	L	棘上窩～肩甲棘～棘下窩	
4	上腕骨	L	遠位端（上腕骨滑車 1/2）	
5	上腕骨	R	遠位端（上腕骨滑車破片）	
6	上腕骨	LR?	近位端（上腕骨頭破片）	
7	橈尺骨	L	近位端～体部 1/2	
8	橈骨	L	遠位端（前面 1/2）	
9	橈骨	R	遠位端（外側茎状突起部分）	
10	橈骨	R	近位端（橈骨頭窩 1/2）	
11	手根骨（橈側手根骨）	L	完存	
12	手根骨（中間手根骨）	L	完存	
13	手根骨（第四手根骨）	L	完存	
14	前肢基節骨	L	ほぼ完存	
15	前肢中節骨	L	近位端～体部 2/3	全長GL (75)mm、近位端幅Bp (43)mm、近位端径Bd (36.5)mm、
16	脛骨	R	遠位端（内果 1/2）	
17	膝蓋骨	LR?		
18	中足骨	L	遠位端	
19	中手/中足骨	LR?	遠位端	

表 1 清水馬場城遺跡出土ウマ遺体の同定一覧表

4 まとめ

以上、清水馬場城遺跡から出土した16世紀後半以降の馬について報告した。

出土したウマは、体高110cm程で、日本在来のトカラ馬クラスの小型馬と推定された。18歳を超える雌の老齢個体で、大きさからみても駄馬、農耕馬として長期間にわたって使用されたものとみられる。

ここで陸奥国府が置かれた多賀城の古代ウマと根城南部氏の居館・根城跡出土の中世ウマと比較してみる。多賀城周辺では山王遺跡、市川橋遺跡の河川跡や道路側溝跡などから膨大な量の骨が出土している。体高分布は110～140cm（平均126.4cm）で、125～130cmの御崎馬クラスのものが主体をなし、7歳くらいまでの比較的若い個体が半数以上を占める。律令国家による国府の運営や蝦夷政策の下、兵士とともに各地から多くの馬が集められ、死後は多賀城の直轄で解体から皮・肉・骨角・骨髄・脳髓などの摘出と加工が組織的に行われていたことが明らかになっている（菅原1996・2001）。一方、根城跡出土のウマは体高が112.8～142.4cm（平均125.5cm）で120cm台半ばをピークとするものが多く、大きさは多賀城周辺と変わらない。年齢は1歳未満の幼齢から約20歳の老齢まで幅広く、銜痕跡が認められない個体も認められた。鎌倉材木座遺跡や由比ガ浜中世集団墓地遺跡など銜を装着した乗用馬主体であった中世鎌倉のウマ（推定体高平均130cm）とは異なり、幼齢の個体も多いことや足への負荷状況から駄用・農耕用としても利用される中世の馬の飼育や多面的な用途の実態について指摘がな

されている(植月ほか2021)。また、死後の取扱いについても、解体処理と皮、骨、肉などの利用の可能性が指摘されている(小林1986)。南部地方は良馬を産出する伝統的な馬産地として知られるが、乗馬用のみならず曳馬等多様な利用の実態も明らかになってきている。

本資料については遺存状況が悪く不明な点も多いが、大きさや年齢、用途など本地域における中近世馬の特徴や利用の一端が明らかになった。

引用参考文献

植月学・覚張隆史・櫻庭陸央・船場昌子2021「中世南部氏の馬利用―根城跡出土馬の動物考古学・同位体化学的研究―」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集

久合田勉1943『馬學 外貌篇』

小林和彦1986「史跡根城跡岡前館から出土したウマの遺存骨」『八戸市博物館紀要』2

菅原弘樹1996「動植物遺体」『山王遺跡Ⅲ―仙塩道路関係遺跡発掘調査報告書―多賀前地区遺物編』宮城県文化財調査報告書第170集

菅原弘樹2001「動物遺体」『市川橋遺跡の調査―県道『泉―塩釜線』関連調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第184集

西中川駿・立松弘・塗木千穂子・真木康之・廣田桂一・松元光春2020「ウマの骨計測値から骨長の推定法―体高推定への応用―」『動物考古学』第37号

林田重幸・山内忠平1957「馬における骨長より体高の推定法」『鹿大農学術報告』6

Drisch,A.von den.1976 A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites.Peabody Museum.Bull.1,Peabody Museum of Archaeol.and Ethnol.,Harvard Univ.,

抄 録

ふりがな	しずのぼばじょういせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	清水馬場城遺跡発掘調査報告書							
副書名	個人住宅新築工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	菅原孝明・千葉孝弥・菅原わかな・畠山篤雄・菅原弘樹							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒029-3105 一関市花泉町涌津字一ノ町29 TEL 0191-82-2242							
発行年月日	2025年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しずのぼばじょう 清水馬場城	いちのせきしせんまぢょう きよ 一関市千厩町 清 たあざひがしきわ 田字東沢34-2	03209	NF92- 2191	38°55'16"	141°23'56"	20240502 ～ 20240528	312 m ²	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
清水馬場城	城館跡	中世	溝	動物遺体				
要約	清水馬場城の北東部を調査し、南北方向に延びる幅3.9m、深さ2.7mの溝1条を発見した。年代は不明であるが、他の地区の調査でこの城の年代が15世紀後半から16世紀後半頃と見られることから、この溝の年代もその頃と推定した。							

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第 42 集

清水馬場城遺跡発掘調査報告書

個人住宅新築工事に伴う発掘調査

発行年月日	令和 7 年 3 月 24 日
発行・編集	一関市教育委員会文化財課 〒029-3105 岩手県一関市花泉町涌津字一ノ町 29 電話 0191-82-2242
印刷	合同会社藤 〒021-0061 岩手県一関市山日字館 64-123 電話 0191-34-7744